

環境マインド育成における文学の可能性

—— 教養科目「環境文学のすすめ」の射程 ——

松岡 幸司

キーワード：環境文学 環境マインド 環境教育 教養科目

0. はじめに

人間を超えた存在を認識し、おそれ、驚嘆する感性をはぐくみ強めていくことには、どのような意義があるのでしょうか。…
わたしはそのなかに、永続的で意義深いなにかがあると信じています¹。

本稿は、筆者が担当する教養講義「環境文学のすすめ」をめぐる報告と考察である。この講義は2009年より担当し始めたものであり、今年度で三期目になる。この講義を担当することになったきっかけは、筆者自身の研究方向性との重なりもあるが、いわゆる「環境教育」に対して筆者がずっと考えてきた疑問に対する答えを見出すことが直接的な理由となっている。つまり、環境教育の現場で行われているのは、多くの場合、「自然科学的・社会的なアプローチによる環境意識の向上」であり、「心の問題としての環境教育」が行われているケースはあまり多くないのではないかと、という疑問である²。「心の問題」というのは、「環境に対する視線が、単に知識で終わるのではなく、心の体験＝自分との関連で考えられるようになる」ことを目指す環境教育を念頭に意識していることを表す。「知っている」と「自分の問題となっている＝現実感覚がある」は別問題であり、(おかしな言い方ではあるが)信州大学が育成を目指す「環境マインド」が、より現実感の伴ったマインドの形成となることを支える一端として、この講義の担当を始めた。

1. 「環境文学のすすめ」開講の背景

本学の学士課程に共通するディプロマ・ポリシー(学位授与の方針)には、「環境マインド」という言葉が明記されており、下記のように「地域環境に関する理解」、「環境基礎力」、「環境実践力」の三つの能力を培うことが各項目の説明とともに挙げられている³。

環境マインド

- ・信州の自然・文化的環境への興味と関心をみずから深めることができる【地域環境に関する理解】
- ・自然および人類社会が直面している環境問題を理解することができる【環境基礎力】
- ・地球環境と人類文化との調和・共生のため、積極的に行動することができる【環境実践力】

また大学の環境方針でも下記のような規定がなされており⁴、大学としての環境教育の方向性が明確にされている。

信州大学環境方針

基本理念

信州大学は、かけがえのない地球環境を守るため、本学における教育・研究、地域貢献、国際交流など、あらゆる活動を通して、人と自然が調和した、持続可能な社会の実現に貢献します。

基本方針

信州大学は、この基本理念に基づき、国内外の機関・団体等とも連携を図りつつ、本学の教職員・学生ならびに本学にかかわるすべての人々との協力のもと、以下の取組を推し進めます。

1. 豊かな自然に恵まれた信州に立地する大学としての特色を生かしつつ、環境に関する教育・研究活動を積極的に進めるとともに、その成果を国内外に発信します。
2. 教育・研究、地域貢献、国際交流など、あらゆる活動を通じて、本学にふさわしい環境マインドを持った人材を育成します。
3. 環境にかかわる法令を遵守するとともに、環境マネジメントシステムの継続的改善を図り、環境負荷の低減と環境汚染の予防に努めます。
この基本方針は文書化し、本学の教職員・学生ならびに本学にかかわるすべての人々に対して周知するとともに、一般にも公開します。

そのような中で、主に初年次学生が学ぶ共通教育においては、下記のような目的を定めた「環境科学群⁵」が設置されている。

信州大学の「環境マインド」教育は、単に理念や理論の教育だけではなく、教職員と学生が協力してエコキャンパスを構築し、その継続的改善という実践行動を通じて、環境問題に対する解決能力の育成を目指しています。本科目群は、私たちが暮らす信州の自然・文化的環境への興味や関心を深め、現代社会が直面している環境問題を科学的に理解し、また問題解決に向けて積極的な行動に結びつくことを目的にしています。

信州大学のすべての学生は、この「環境科学群」の2単位を必修として履修することになっている。2011年度は、「環境の構造と動態（計16コマ）」、「環境と社会（計24

コマ)」、「環境と技術 (計 15 コマ)」という三つの授業科目の中で、計 55 コマ相当の講義やゼミナールが開講されている⁶。「環境文学のすすめ」は、「環境と社会」に入っている。

2. 環境文学と環境教育について

「はじめに」でも述べたが、筆者が長年疑問に思っていたのは、「自然破壊や環境に関する諸問題が地球規模で危急の問題であるという認識が一般的に共有されている (ように見える) にもかかわらず、なぜなかなか改善されないか」ということであった。この問題は筆者が学生時代から抱え、結果として環境文学へと足を踏み入れることになった問題であった⁷。頭でわかっている、あるいはわかったつもりではあっても、実際にはなかなか行動に移すことができないのはなぜか? 「知っている」と「問題に対処する」ことの間には何か問題があるのではないか? これらの問題に対する筆者の研究姿勢の根底にあるのは、林学者である山縣氏の言説である。

エコロジー意識や自然に対する心のもち方について、... それが一ひとの心に定着するためには、環境の悪化への恐怖をかきたてたり、生態系を科学的に解明し、理解を加えるという道も結構であるが、わたしには、むしろ文学的、美的感動をひとひとの心にいかに起こすかということのほうがより大切に思われてしかたがない⁸。

山縣氏の「心のもち方」という点がポイントである。確かに昨年の東日本大震災と、それに端を発した福島での原発事故 (FUKUSHIMA⁹) 以来、放射能に対する恐怖から日本全国において原子力発電に対する危機意識が高まってきている。しかしこの危険性は以前から存在したものであり、私たちはそれを「知っていた」はずである。現に日本でもこれ以前に原発での事故が起きているが、その事件を「知る」だけでは、現在のような危機意識は生じていなかったのは周知のことである。環境教育の場においても、「知っている」という知識の面だけではなく、(直接的、あるいは間接的な) 体験により生じる「心の問題」として自然破壊や環境に関する諸問題をとらえるべきなのではないだろうか? この点については、本稿の冒頭にも引用を挙げ、講義でも扱っているレイチェル・カーソンが次のように述べている。

美しいものに対する感性、新しいものや未知のものに対する興奮、思いやり、憐みそして称賛や愛情といった感情、これらのような心の動きがひとたび起こると、私たちは、自身の感情の向いたものに対しての知識を欲するようになります。そしてひとたび (その知識を) 見つければ、それは永続的な意味を持つのです¹⁰。

上記二つの引用で述べられていることは明らかである。心の動き、感動、感情の向きといったこと、そしてそれを出発点とした知識の定着の重要性である。これを言い

換えると、「心で体験すること」の重要性とそれによって求められた「知識が永続的な意味を持つ」ということになる。

このような観点からネイチャーライティングや環境文学を検討すると、それらを通じた環境教育における意義が明らかになる。

それでは「ネイチャーライティング」や「環境文学」とはどのようなジャンルなのか？¹¹

「ネイチャーライティング」とは、「科学的言説と詩的語りの結合した」スタイルによって「自然と人間の関わり」を省察する「一人称形式のノンフィクション」形式のエッセイである。そこでは、「観察対象と観察主体の相互的な関係」が焦点となり、その記述は、「自然と人間との交感的関係」を描いたものとなる。それによって、人間社会がいかにしてこの地球の現実と「実質的な関係」を結びうるか、ということが焦点となっている。

「環境文学」というジャンルを簡単に説明すると、上記のネイチャーライティングを、エッセイという範疇から拡大したもの、ということができよう。つまり「環境と人間の関係を扱う」文芸ジャンル全般、小説、詩、戯曲といったもの、言いかえれば、ノンフィクションの枠も取り去ったものである。つまりフィクションではあるが、地球の現実との実質的な関係を考えるという点で「場所の感覚 Sense of Place」という観点が重要になる。

このような文学作品を読むという「体験」は、読者が自然や環境を「心で体験」し、現実感覚のともなった視線を向けるようになる契機となる可能性を持つ場であるのだ。このような観点から、環境教育における「心の体験の必要性」を重視し、文学を通じた「心による自然体験」を行うことで、既存の環境教育のコンテンツを、「単に勉強する対象ではなく身近なものとして学生が実感する」ことができるようにする。これが、環境教育のコンテンツとして文学からのアプローチを用いるという本講義のねらいである。

3. 「環境文学のすすめ」（報告：2009～2010年度）

ここまで述べてきたことを土台として、2009年度の後期に「環境文学のすすめ」が開講した。

講義のコンテンツについては、2009年度と2010年度には特に変更点はない。ただ、2010年度からは、「高等教育コンソーシアム信州」へ配信する遠隔授業¹²になった点が異なっている。その際の、授業運営上の大きな変更点は、以下の三点である。

- 資料の配布は、すべて LMS¹³上で行う
- 毎回の「授業内容確認シート」は、「確認課題」として LMS 上で提出し、採点後の返却も LMS 上で行う
- 板書を行わず、すべて Power Point のプロジェクター投影による

「授業のねらい」では、環境を文化の側面からとらえることにより、自分の「心の

授業科目	環境文学のすすめ				松岡 幸司
授業題目	環境文学のすすめ				
英文授業名					
単位数	2	講義期間	後期	曜日・時限	水曜・3時限
講義室	共通教育71 講義室		授業形態	講義	備考
担当教員	松岡 幸司				
対象学生	全				
授業内容	<p>(1) 授業のねらい 本講義は、本学の教育目標の一つ「環境マインドをもつ人材の育成」を指すものである。「環境」という対象を文化の側面からとらえることにより、自然科学的な視点ではなく、自分の「このころの問題」として自然や環境をとらえる豊かな感性をもった「環境マインド」を受講学生が持つことが本講義のねらいである。</p> <p>(2) 授業の概要 自然や環境について語る際、自然科学的なデータや社会現象については情報があふれかえっているが、「このころの問題」として語ることはあまり多くないが、本講義ではこの観点からアプローチしていく。 最初の3回で自然・環境・人間の関係について概観した後、個々の文学作品を通して、上記三者の関係について考えていく。扱う作品は、少なくとも該当部分に関して授業前に読んでおく必要がある。 講義形式ではあるが、講義中に質問について考えてもらい、応えてもらうこともある。また、毎回講義の最後の時間に「授業内容確認シート」を書いてもらう。これは、その日の講義内容について簡単なまとめを行うことを目的としており、受講学生の理解の助けになるだろう。</p> <p>(3) 授業計画 1. オリエンテーション：「環境」って何だ？ 2. 「自然と人間」の関係 3. 「文学と環境」について：「ネイチャーライティング」と「環境文学」 4. H.D. ソロー：『森の生活』 5. レイチャエル・カーゾン(1)：『沈黙の春』 6. レイチャエル・カーゾン(2)：『センス・オブ・ワンダー』 7. 宮澤賢治『注文の多い料理店』(1) 8. 宮澤賢治『注文の多い料理店』(2) 9. グリムの森～記憶の集積～(1) 10. グリムの森～記憶の集積～(2) 11. ヘルマン・ヘッセ～自然との対話～(1) 12. ヘルマン・ヘッセ～自然との対話～(2) 13. シュテュープター(1)：穏やかな法則 14. シュテュープター(2)：場所の感覚 15. 試験</p> <p>(4) 成績評価の方法</p>				
授業で得られる「学位授与の方針」要素/◎：全学共通	<p>◎環境基礎力 文学を媒介とすることで、こころや感性を通して環境を認識することを学ぶ</p> <p>◎多様な文化芸術マインド 自然や環境との関係から文学に触れることで、多様な文化を享受する感性を育む</p> <p>◎人類知の継承と未来創造 現代に限らず過去の文学作品を読むことで、人類が蓄積してきた知・感性を受け継ぎ、今後の人生における創造的マインドを豊かにする</p>				
【教科書】	野田研一：『自然を感じるこころ、ネイチャーライティング入門』ちくまブリーマー新書065、¥720-				
【参考書】	その他、初回授業時に扱う作品と資料のリストを配布する。				
野田研一：『交感と表象、ネイチャーライティングとは何か』松柏社、¥2,800-	その他、初回授業時およびその都度紹介していく。				

問題」としてとらえる感性をもった「環境マインド」の育成を目的として記している。「授業の概要」では、上記「ねらい」の補足をしつつ、授業の進め方を解説しているが、詳細は前ページのシラバスを見て頂くとして、ここでは「授業計画」に記されたコンテンツについて説明を行うことにする。

1) 導入部分

1. オリエンテーション：「環境」って何だ？
2. 「自然と人間」の関係
3. 「文学と環境」について：「ネイチャーライティング」と「環境文学」

最初の三回では、タイトルを見ればわかるように、実際の環境文学作品を扱う前に、「自然」、「環境」、「それらと人間との関係」といった、「環境」を考える上での基本的な概念や関係を明確にした上で、「ネイチャーライティング」や「環境文学作品」、あるいは「環境批評」といった文学的な視点・アウトラインを解説した。「環境」や「エコ」といった、巷にあふれている言葉とその背景を明確にすることで、本講義の出発点としている。

この導入部分が終了した段階で、確認のためにレポートを課した¹⁴。

2) 扱った作品について

すべての作品を学生が購入するのは大変なので、講義で扱う部分を資料として前の週に配布している。

ソローとレイチェル・カーソン

4. H.D.ソロー『森の生活』
5. レイチェル・カーソン(1)『沈黙の春』
6. レイチェル・カーソン(2)『センス・オブ・ワンダー』

ネイチャーライティングのバイブルとも言える『森の生活』や、環境を考える上での、こちらもバイブルである『沈黙の春』を最初に扱った。

引き続き、子どもに対する「環境教育的視点」を明確に示しつつ、大人の心にも感動を与える美しい作品である『センス・オブ・ワンダー』を扱った。

宮澤賢治の童話とグリム童話

7. 宮澤賢治『注文の多い料理店』(1)
8. 宮澤賢治『注文の多い料理店』(2)
9. グリムの森～記憶の集積～(1)
10. グリムの森～記憶の集積～(2)

学生が一度は読んだことがあると思われる、比較的身近な作品を通して、環境文学作品のアウトラインや環境文学的視点による読みを体感してもらうことを意図している。

ヘッセとシュティフター

11. ヘルマン・ヘッセ～自然との対話～(1)

12. ヘルマン・ヘッセ～自然との対話～(2)

13. シュティフター (1)：穏やかな法則

14. シュティフター (2)：場所の感覚

筆者の専門がドイツ文学ということもあり、エッセイや詩の中に自然に対する視線がふんだんに盛り込まれているヘッセと、筆者の研究対象であるシュティフターの作品を扱った。特にシュティフターに関しては、環境文学のキーポイントになる「場所の感覚」が非常によく表れている作品¹⁵を扱うことで、講義全体で扱う作品のまとめとした。

3) 成績評価

15. 試験

あらかじめ設問を提示することで、学生たちに何を考え、学び取って欲しいか、ということを確認にした上で筆記試験を行った。

3. 「環境文学のすすめ」（報告：2011年度）

授業のコンテンツ（扱った作品）の対照表		
	2009, 2010 年度	2011 年度
1.	オリエンテーション：「環境」って何だ？	
2.	「自然と人間」の関係	
3.	「文学と環境」について：「ネイチャーライティング」と「環境文学」	
4.	H.D.ソロー『森の生活』	
5.	レイチェル・カーソン(1)『沈黙の春』	
6.	レイチェル・カーソン(2)『センス・オブ・ワンダー』	
7.	宮澤賢治『注文の多い料理店』(1)	ギッシング『ヘンリ・ライクロフトの私記』
8.	宮澤賢治『注文の多い料理店』(2)	宮澤賢治『注文の多い料理店』
9.	グリムの森～記憶の集積～(1)	石牟礼道子『苦海浄土』
10.	グリムの森～記憶の集積～(2)	棄老物語：深沢七郎『楢山節考』, 村田喜代子『蕨野行』
11.	ヘルマン・ヘッセ～自然との対話～(1)	グリムの森～記憶の集積～
12.	ヘルマン・ヘッセ～自然との対話～(2)	ヘルマン・ヘッセ～自然との対話～
13.	シュティフター (1)：穏やかな法則	
14.	シュティフター (2)：場所の感覚	
15.	試験	まとめ+G.パウゼヴァング：『みえない雲』

授業のねらいや概要、成績評価の方法については 2010 年度までとほぼ同じであるが、コンテンツに変更を加えた。その理由は「東日本大震災」および「FUKUSHIMA」をきっかけとして¹⁶、本講義のコンテンツも、もっと日常や社会の問題に近いものであるべきだろう、と考えたことによる。具体的には、前年度までの内容を再検討し、

扱う作品（作家や国など）の偏りを是正しつつ、日本の伝統や歴史、社会問題との関連を意識した作品を取り入れた。

扱った作品について

ネイチャーライティング

4. H.D.ソロー『森の生活』
5. レイチェル・カーソン(1)『沈黙の春』
6. レイチェル・カーソン(2)『センス・オブ・ワンダー』
7. ギッシング『ヘンリ・ライクロフトの私記』

2011年度はイギリス人のエッセイ風小説を加えた。これは、ソローやカーソンのエッセイよりも文学的・小説的要素の高い作品を扱うことで、「環境文学」作品への移行をスムーズにすることを目的としたものであったが、学生たちにはやや難しすぎたようである。

日本文学

8. 宮澤賢治『注文の多い料理店』
9. 石牟礼道子『苦海浄土』
10. 棄老物語：深沢七郎『檜山節考』，村田喜代子『蕨野行』

水俣病をえがいた『苦海浄土』は、環境文学研究においてもしばしば扱われる作品である。日本で発生し、学生たちが社会（歴史）の授業で学んだ事件を扱うことで、社会問題を「体験」し、現在進行中の FUKUSHIMA という身近な問題へ目を向ける契機となることを狙った。

それに対して二つの棄老物語は、かつての日本で行われていたとされる姨捨の伝説を基にしているが、自然環境の中で生き、そして死と対峙する人間の姿から「生と死」と自然の関係を考えることを目的とした。

ドイツ文学

11. グリムの森～記憶の集積～
12. ヘルマン・ヘッセ～自然との対話～
13. シュティフター (1)：穏やかな法則
14. シュティフター (2)：場所の感覚

ネイチャーライティングや日本文学の作品を新たに加えたことにより、ドイツ語圏文学の作品数は減ったが、その分、全体のバランスが修正され、より多岐にわたる作品を扱うことができるようになった。

15. まとめ+G.パウゼヴァング：『みえない雲』

期末試験をレポートにしたことで、15回目の授業はまよめの時間としたが、やはり FUKUSHIMA の問題へ目を向けることも意図して『みえない雲』を紹介した。この作品は、チェルノブイリの原発事故の翌年（1987年）にドイツで出版された作

品であるが、ドイツでチェルノブイリ並みの原発事故が起きたことを想定して書かれている¹⁷。被曝者となった主人公の高校生の少女と年齢も近いこともあり、学生たちも興味深く聞いていたように思う。

4. 「環境文学のすすめ」の射程（2012年度以降の展望）

環境教育への環境文学の導入を目指す本講義「環境文学のすすめ」は、ようやく三セメスターを終えたところである。将来的にはさらに、「すすめ」に続く段階へと発展させていきたいと思うが、ここまできて様々な問題点が明らかになってきた。

問題点 1：作品

教養講義である「環境文学のすすめ」は、専門課程における文学特論やゼミとは違い、あくまで環境マインド育成のための「導入」講義であるために、様々な作品を扱い、受講学生の視野を広げつつ、様々な「体験」をしてもらうことを意図している。そのために、はじめの3回の導入部分以降は、毎回異なった作品を扱っているのだが、毎回作品の一部を資料として配布するのでは、作品の一部に触れるにとどまってしまい、なかなかその先へと誘導することが難しい。また、講義では扱わない作品への展開もあまり望めそうにない。確かに、筆者の所属している「文学・環境学会（ASLE-Japan）」および学会員によって、ネイチャーライティングの入門書¹⁸が出版されてはいるが、多数の作品の紹介にとどまるか、専門研究のための書物という感が否めない。この問題を解決する一つの方法は、環境文学作品を集めたアンソロジーを作成することだと思われるが、作品の選定や該当箇所抽出など、今後検討が必要である¹⁹。

問題点 2：事前に読ませる

現在は、作品の一部を前の週に資料として配布し、読む際の視点を挙げて授業までに読んでくるように指示するのであるが、実際には読んでこない学生が少なくないのが現状である。確かに小説の場合は、作品の全体像が見えない中でその一部分だけを読んでも、つかみどころがないのも事実であろう。「読み」や視点について講義したりグループワークをしたりする前に、どうやって受講学生たちにテキストを読ませるか、ということも大きな問題である。

問題 3：教科書

現在使用している教科書はネイチャーライティングをメインテーマとしたものであり、環境文学の「教科書」として大学1年生に読ませるものが見当たらない。環境文学に関する専門書は様々なものがあるのだが、やはり導入には難しすぎるように思われると同時に、あくまで「文学」の文献である。今後は「環境教育」を前提とした環境文学の書籍の作成が急がれる。

問題 4：発展性

「環境文学のすすめ」は、毎年の冬学期に開講されているが、これは、本学で唯一の環境文学に関する授業である。本学の「環境マインド」育成プログラムの中で、他の環境科学群の授業との関連性はもちろんのこと、環境文学を通じた環境教育コンテンツの充実をはかる必要があるだろう。

とりあえず四つの問題点を挙げたが、各項目においても、もちろんここに挙げた点に限られるわけではなく、ましてや単純な問題ではない。本講義内の問題、そして本講義と本学の環境教育プログラム全体との有機的関係を連動させ、総合的に対処していく必要があるだろう。今後は「環境文学のすすめ」の検討と改良に並行して、これらの問題の解決を進めていくことが急務であろう。

本稿は、文部科学省科学研究費挑戦的萌芽研究 23650504「心の自然体験：環境教育における文学教育プログラムの作成の試み」（代表者：松岡幸司）における取組の一環として執筆された。

注

- ¹ レイチェル・カーソン（上遠恵子 訳）『センス・オブ・ワンダー』（新潮社、1996年、p.50）
- ² 「意識」と「心」の違いの例としては、エコ（ECO=Environmental COnciousness 環境に対する意識）という言葉で説明できよう。日常的に「エコ」という言葉を使う場合（例えばエコカー、エコグッズなど）、「環境に配慮した」という意味で使われている。この場合、確かに「配慮する」という行為ではあるが、果たして環境への効果を実感しているだろうか？それよりも、自然や環境というものを「感情的に体験する」という点を強調する意味で、筆者は「心」という言葉を用いている。
2011年度の最後の授業の確認課題では、「自分たちがいかに自然に対して知識だけに偏り、情報としてしか自然をとらえていないのだと考えさせられた」、「この講義を受けて、別に科学的知識がなくてもいい、環境のことを考えるのはそんなに難しいことじゃないのだと知った。自分が感じるままに受け入れ、そこから自然について考える。それなら私にもできると思った」というような肯定的なコメントが数多く書かれている。
- ³ 信州大学学位授与の方針：http://www.shinshu-u.ac.jp/guidance/diploma/#common_policy
- ⁴ 信州大学環境方針：<http://www.shinshu-u.ac.jp/environment/outline/policy.html>
- ⁵ 信州大学全学教育機構：<http://www.shinshu-u.ac.jp/faculty/general/subject/e-lecture.html>
- ⁶ 開講題目数は、同一題目であっても複数コマが開講されている場合は、それら全てをカウントした。
- ⁷ 筆者は、農学部林学科を卒業した後、独文科に学士入学して文学研究の道に入ったが、それ以降、「人間と森林の関係」あるいは「人間と自然・環境の関係」をテーマとして研究を続けている。
- ⁸ J.ヘルマント（山縣光晶訳）『森なしには生きられない。ヨーロッパ・自然美とエコロジーの文化』。築地書館 1999年、p.20。
- ⁹ 福島での原発事故は、海外では FUKUSHIMA という固有名詞で報道されている。この箇所以降は FUKUSHIMA と略す。
- ¹⁰ Carson, Rachel: *The Sense of Wonder*. Harper Collins Publishers. 1998. New York. p.56. 訳、および斜字体部分は筆者による。
- ¹¹ 以下、「ネイチャーライティング」と「環境文学」の説明については、下記拙論を参照されたい。

松岡幸司『「1842年7月8日の日蝕」：翻訳と解説 ―ネイチャーライターとしてのシュティフター―』（信州大学人文社会科学研究会編「信州大学人文社会科学研究」第5号、2011年、pp.142-151）特に「1. ネイチャーライティングとその周辺」p.142-143.

¹² 「高等教育コンソーシアム信州」は、長野県内の8大学の連携によって2008年11月に発足した大学コンソーシアムである。2009年後期の試行を経て、2010年4月より各大学の教養科目の遠隔配信を開始している。

（高等教育コンソーシアム信州：<http://www.c-snet.jp/>）

本コンソーシアムの遠隔授業については、下記参照。

cf. 松岡幸司・森下孟『遠隔システムによるドイツ語のリアルタイム双方向授業』（松岡幸司編著『教室という現場から考える日本のドイツ語教育』。日本独文学会研究叢書079。日本独文学会、2011年、pp.59-73）

¹³ LMS（Learning Management System）とは、Web上で資料配布、意見交換、課題提示・提出などを行うことができる学習管理システムのことである。高等教育コンソーシアム信州の遠隔授業では、LMSとしてeChesと名付けたmoodleを使用している。

¹⁴ レポートの出題に際しては、スタディスキルの向上も念頭に置いている。内容（複数項目を指定）の分量と観点を指定し、引用の形式や記述の方法などを細かく指示している。そして返却の際にコメントを加えることで、期末試験に向けて、レポート作成能力の向上をはかっている。特に2011年度は期末試験にかえてレポートを出題し、LMSにて提出させた。これにより学生たちへのレポート返却もスムーズとなり、学生自身が自己点検できることが期待される。

¹⁵ これはシュティフターの作品集『石さまざま（Bunte Steine）』に収められている「みかげ石（Granit）」のことである。下記拙論で述べられている「記憶の継承」が行われる場所、つまり故郷という「場所の感覚」が色濃く出ている作品である。

松岡幸司『記憶の奥行き―「みかげ石」における時間と空間―』（磯崎康太郎編著『アーダルベルト・シュティフター 1805/2005。―イメージ・空間・記憶―』。日本独文学会叢書043。日本独文学会、2006年、pp.1-8）

¹⁶ 筆者は、3月11日を八戸出張中に迎え、二晩を避難所で過ごしたのだが、この経験は自分自身のスタンスに大きく影響した。

¹⁷ 2012年2月現在、版元品切れの状態、作品紹介をするにとどまった。

¹⁸ 文学環境学会編『たのしく読めるネイチャーライティング―作品ガイド120』2000年、ミネルヴァ書房。

¹⁹ 文学・環境学会の有志で、環境文学による環境教育のための教科書や環境文学作品のアンソロジーの作成を目指したワーキンググループを結成した。

（信州大学 全学教育機構 准教授）

2012年2月12日受理 2012年2月14日採録決定